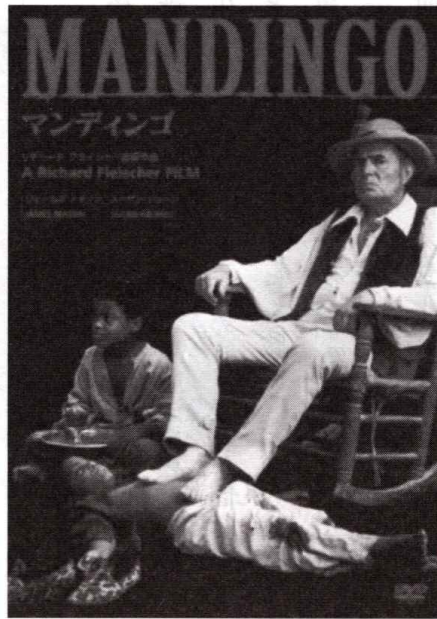


マンディングゴ
(米・1975)



アメリカの奴隷制度について、字面の上でしか理解していなかったことを、痛いほど思い知らされた。人間がいかに奴隷として、すなわち非人間として扱われていたか。この点を本作品はえぐいばかりにみせつけてくれる。

舞台は南北戦争前のアメリカ南部ルイジアナ州の奴隷農場である。冒頭に白人の農場主一家が食事をとるシーンが出てくる。テーブルから

を当然のごとく受け入れ、年老いた黒人女性たちから「初夜」の挙措を教わるのだ。

ニューオーリンズの黒人市場の場面にも強烈な印象を受けた。ファッションショーのモデルのように、群がる白人たちの前に黒人奴隷が次々に出てくる。白人たちは奴隷としての「力量」を値踏みして競り落としていく。屈強な「優良種」の奴隷は「マンディングゴ」とよばれた。

これが題名になっている。夫に先立たれた中年女性が「マンディングゴ」のミードの陰部をまさぐる。これも奴隷に求められた「力量」なのだった。また、白人たちがいかつい奴隷同士を文字どおりどちらかが死ぬまで闘わせる賭け事に、下卑た表情で歓声を上げながら興じているシ

ーンは直視できなかった。

さて、ウォーレンの息子ハモンドはく

やや離れて対角線上に立つ黒人奴隷の子ども二人が、大きな扇でずつとあおいでいる。この光景にまずずつとさせられる。農場主ウォーレンはリウマチ持ちで、医師から黒人の子どもの足の下に敷いて毒をすわせればよくなるといわれた。そこでウォーレンは椅子に座つてるときは黒人の子どもを必ず足台にする。黒人の娘は白人男性の性の慰み者だった。彼女たちはそれ

だんの女性に競り勝ってミードを落札する。ハモンドはいとこのブランチと結婚していたが、新婚当初から不仲だった。ハモンドはブランチの家から買われてきた黒人娘エレンと関係を深める。一方、ブランチはいわゆるセックスレス状態に置かれアルコールに溺れていく。ハモンドはエレンをはらませる。ブランチは逆上してエレンをむち打ちした挙げ句、階段から突き落

として流産させる。そのことでハモンドがエレンに同情していることを知ると、ミードとの性交渉に走る。「めでたく」ブランチは妊娠する。それを聞いたウォーレンは孫ができた喜び。ブランチの分娩には医師と黒人女性二人のみが立ち会った。ブランチが生んだ赤ん坊の肌は白くなかった。それをみた医師は一瞬逡巡したのち赤ん坊を「間引き」する。別室で待機していたウォーレンとハモンドには「死産だった」と伝える。ハモンドは医師が止めたにもかかわらず赤ん坊を見に行く。そして事情をすべてのみこんだハモンドは、老いた奴隷を死なせる毒薬を医師にせがむ。人ではなく奴隷ゆえに使用物にならなければ始末されたのだ。言葉を失う。ハモンドは毒薬を混ぜた酒をブランチにあおらせる。次にミードを釜ゆでにしようとするが、波乱の展開でエンドとなる。

当時のアメリカ南部の恥部を、タブーを恐れず描ききった傑作である。それだけに、公開時には「最悪の映画」をはじめいわれなき指弾にさらされた。ただ、快作『パルプ・フィクション』などの監督クエンティン・タランティーノは高く評価したという。さすが悪童！

(二〇二二年三月一四日・新宿武蔵野館)

(にしかわ・しんいち／明治大学教授)